



降り行く雪

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

白虎達の恒例行事である武道大会が終わり数ヶ月。

もうすぐ冬へと変わりそうな終わりの秋風を横に、4人が泉の庭園へと集まっていた。

「さーて、今度は冬ね。」

「秋も早く終わっちゃったしな。」

「大会、楽しかったしな。」

4人はそれぞれ会話をしつつ、泉へ

「今度はジョイの番だね。」

「頑張れよ。」

「うん。頑張ってみるよ。」

ジョイは皆に言うと泉へと入っていった。

「行っくわよー！」

ジョイはそういうと、勢い良く泉の上で踊り始めた。

手から水が撒かれ、美しいベールのようにジョイと共にダンスの中へと入っていた。

しばらくジョイが踊っていると、段々泉から冷気が漏れ始め、ドライアイスのように霧が出てきた。

そして踊り終わると、その霧は上空へ勢い良く撒かれ、雪へと変わり、島へと降り注いだ。

「うわー雪だ！」

アルドールは落ちてきた雪を手の平に乗せつつ言った。

「綺麗だなー」

「コレで冬へと変わったわけだな。」

3人はそれぞれコメントを言っていると、ジョイが戻ってきた。

「おつかれさまー」

「綺麗だったぜ。」

「ありがとうー」

ジョイは喜びつつ言った。

「あ、そうだ皆。 今日、アレやりたいんだけど、今からいい？」

ジョイは急に思い出した用事を皆に提案した。

「ああ、アレね。」

「そろそろやると思ってたんだ。」

「いいぜ。」

三人は何の用事なのか察しが着き、OKを出した。

「じゃあそうと決まったら行きましょ！」

ジョイは喜びながら目的地へ向かっていった。

三人はそんなジョイのあとを付いていった。

北側 雪原エリア

ジョイの舞が終わって約30分。

北側のエリアはすでに雪が多く降っており、段々と足元を雪で覆いつくしていた。

「相変わらずここはすごい量の雪だな。」

「まだそんなに時間が経ってないのにね。」

ストレンジャーとアルドールはそういつつ、ジョイの家へ向かっていた。

「よし、アレやろっと！」

ピスフリーはそういうと、結構積もった雪の上へダイブした。

ポフッ！

「やっぱり雪はいいなー 冷たくて気持ちいいー」

ピスフリーは顔を埋めたままそういった。

「毎年やるよな、ピスフリー。」

「冷たい雪、好きだもんね。」

二人はそういうと、ピスフリーは体を起こし、服に付いた雪を払った。

「きっちり跡が残ってるな。」

ピスフリーは先ほど自分がダイブした場所を見つつ言った。

雪には綺麗にピスフリーがダイブした痕跡が残っていた。

「三人とも置いて行っちゃうよー？」

ジョイは寄り道している三人に声をかけた。

「おっと、そうだったな。 ピスフリー行くよ。」

「待ってー」

「置いていくんじゃねーよ。」

三人は多少駆け足でジョイの元へ向かっていった。

四人はジョイの家へ付くと、家の地下室へと向かっていった。

そこはジョイの趣味であるギャンブルのたくさん出来る、いわば自家製カジノである。

地下室の扉を開けると、華やかなネオンが照らされている大掛かりなカジノが広がっていた。

「毎回の事ながらやっぱりすごいなー」

「本当、どうやったらこんなにたくさんの家具とかが手に入るのかしら？」

アルドールは近くにあるカジノテーブルを見つつ言った。

「ほとんどはネットよ。取引は別の島で全部やって、お父様に運んでもらってるの。」

「金もあり、労働力もありだしな。ほぼ何でもありだなジョイ。」

家具の収入ルートを話しているジョイに、ピスフリーは口を挟んだ。

「まあそういうのは置いといて、早くやりましょ！」

ジョイはいつものテーブルへ向かって歩いていった。

ストレンジャー達はあとに続いてテーブルへ向かっていった。

ジョイの趣味の一つであるギャンブル。

ギャンブルといっても、本当にお金はかけず、ジョイは遊びで楽しんでいる。

だが遊びにしては強い運があり、誰が相手でも、ほぼ勝ち星なのだ。

ジョイ達はまず、ポーカーで遊んでいた。

コインを事前に賭け、そのあとにカードをひいていた。

「フルハウス！」

ピスフリーは出来たトランプの目をいいつつ、テーブルへ出した。

「いきなり強い目かよ！」

ストレンジャーは自分の手札を見つつ、ピスフリーに言った。

「ええー それじゃあちょっと勝てないわね。」

アルドールは自分の手札をテーブルに出しつつ言った。

「俺はスリーカード、アルドールはフラッシュか。 ジョイは？」

ストレンジャーは手札をテーブルに出し、まだ出していないディーラーのジョイに言った。

「今回こそは俺が勝つぜ。」

ピスフリーはジョイを見つつそういった。

「残念だけどそうはさせないわよ。 2のフォーカード！」

ジョイは自分の手札をテーブルに出しつつ言った。

「げ！ マジかよ！！」

「今回も私の勝ちよピスフリー！」

ジョイはテーブルに置かれたコインを回収しつつ言った。

「やっぱりジョイは強いよな。」

「本当に運が強いよね。 ジョイ。」

アルドールはトランプをシャッフルしているジョイに向かって言った。

「私もなんでかはわかんないけど、いつもこういうのが来るのよね。」

ジョイはトランプをシャッフルし終え、カードを配りつつ言った。

「まったく、俺はいつになったらジョイに勝てるんだ？」

ピスフリーは配られたカードを見つつ言った。

「当分無いわよ、きっとね。」

「厳しい一言だな、まったく。」

「ま、気楽に行くしかねえな。」

ストレンジャーはそんな二人のやり取りを見つつ、苦笑していた。

「さ、次のゲームを始めましょ！」

数時間後・・・

4人はそのあと、いろいろなゲームをして、お開きとなった。

すでに外は夕方を少し越えた時間で、少々薄暗くなっていた。

4人は別れ、ストレンジャー達はいっしょに元の場所へ戻っていった。

ジョイはそのまま、家とはちょっと別の方へ歩いていった。

着いた先は、北側の海岸だった。

雪が降る中、海は静かに波の音を立てていた。

「やっぱり冬だから海の水が冷たいなー」

ジョイは海の水に触れつつ言った。

ジョイの趣味である水泳は、冬では何も出来ないため、海岸の散歩を日課に含めているのだ。

「あれ？」

ジョイは自分のいたところから数メートル離れた所に、何かが打ちあがっているのを発見した。

ジョイはそのままの足で、打ち上げられたものを確認しに行った。

「なんだろう、コレ。」

ジョイが見つけたものは、直径約20cm位のコインだった。
だが打ち上げられたせいか、砂や海草がまとわり着いており、少々汚い。

「コレくらいなら落とせるかな。」

ジョイはコインを左手に持ち、右手をコインの面の上に当てた。

「それ！」

ジョイの右手から水が出始め、水はコインを包み込み、洗浄し始めた。

しばらく洗い、ジョイはコインに付いた水を払った。
コインはすっかり綺麗になり、綺麗な金色のコインになった。

「うわぁ、綺麗なコイン。」

表面、裏面共に同じ絵柄で、六方星が描かれていた。

「せっかくだから、持って帰ろっと。」

ジョイは両手でコインを持ち、家へと帰っていった。

冬の始まり

テトラクリスタルアイランド

冬の儀式を終え、次の日。

島には大量の雪が降り注ぎ、島全体が雪景色と変わっていた。

北側のエリア以外は、すでに雪が止み、朝日が注がれていた。

「う、うーん。」

いつも通りの時間に起床したストレンジャー

「うーん。 今日もいい天気ー」

昨夜の雪のため、閉めた窓を開けつつ言った。

だが少々寒いため、少々開けただけですぐ閉めた。

「朝の空気が涼しいな。」

ストレンジャーはさっきまで自分が寝ていたベットの布団をたたみつつ言った。

本来、寒さには弱いストレンジャーだが、四神の服を着ているため、周りの温度には左右されなくなるのだ。

おかげで苦手な冬が来ても、ご覧の通り、寒さを感じることはあまり無くなった。

「うーん。」

ストレンジャーが布団をたたんでいると、同じ部屋で寝ていたビリーブが起きた。

「ストレンジャーさん、おはよう。」

「ビリーブ。 おはよう。」

「うう、ちょっと肌寒いかな。」

ビリーブは身震いをしつつ言った。

「今日は雪が降った朝だからな。 とりあえずコレつけなよ。」

ストレンジャーはクローゼットにしまってあったマフラーを出し、ビリーブに手渡した。

「いいんですか？ ありがとうございます。」

ビリーブはストレンジャーからマフラーを借り、首に巻いた。

「うわぁ、あったかーい。」

ビリーブはマフラーに顔を埋めつつ言った。

「冬が終わるまで使っていていいよ。俺は服だけで十分だら。」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせていただきますね。」

ビリーブは笑顔でそう言った。

その後、朝食を終え、ストレンジャーは外へと出て行った。

すると外には元気に雪で遊ぶ子龍達がいた。

まだ朝早いにも関わらず、皆は楽しそうだ。

その様子を見つつ、ストレンジャーはいつもの花園へと向かっていった。

花園に付くと、そこは雪に埋まった花々がいた。

「昨日の雪で結構埋まったのか。少しは退けるか。」

ストレンジャーはそういうと、手に木製の片手スコップを召還し、地道に雪をどかす作業を開始した。

しばらく作業し、半分くらいの雪をどかした。

「ふう、コレで半分か。」

ストレンジャーは一回立ち上がり、花園を見渡した。

雪をどかした部分からは、花々が顔を出していた。

「まだ終わりそうに無いな。」

ストレンジャーは再び座り、雪をどかし始めた。

「珍しい作業をしているな。」

「そちらも珍しいな。しばらく顔を見ていなかったが、元気だったか？」

ストレンジャーは作業をしつつ、森にいたコテージに返事をした。

「まあな、そこまで心配されるようなことはしてないよ。お前は何をしてるんだ？」

「花々の上に積もった雪をどかしてるのさ、せっかく綺麗な花が咲いているのに、見えないのは寂しいだろ。」

ストレンジャーは姿を現さないコテージに向かっていった。

「俺にはわからないな。そんなことをして何の意味があるのかが。」

「あんまり意味は無いよ。でも、俺はそれがしたいから、この作業をしてるのさ。」

「意味も無くする作業、か。」

コテージは呟くように言った。

「そういえばお前、いつも一人だけど、寂しくないのか？」

「俺はあんまり誰に対しても親しくならなからな。寂しいを乗り越えて、別に気にしてないよ。」

「それはそれで、ちょっと寂しいな。」

ストレンジャーは作業を終え、コテージのいると思われる方を向きつつ言った。

「たとえ誰であっても、一人で平気なやつなんていないさ。俺だって、一人じゃたいしたことが出来ないし、何より心細いな。コテージは、そんな事無いのか？」

「さあな、そこまで考えたこと無いよ。そこまで交友的ではないし、俺だって、相手の事を好きにはなれないからな。もちろん、おまえもだ。」

「まあそれならそれでもいいか。でも、また暇なとき、こういう風に来てくれると、俺はうれしいさ。」

「うれしい？ なんでだ？」

コレージはストレンジャーの言ったことが理解できず、問いかけた。

「あまりあってない人ほど、会いたくなるものなのさ。 たとえ、相手が興味なくてもだ。」
「そうか。」

コレージはそういうと、姿を消した。

ストレンジャーは先ほどまで使っていたスコップをじょうろの隣に置き、泉の庭園に向かっていった。

ストレンジャーが泉の庭園に向かうと、そこは一面雪のゲレンデが広がっていた。

「やっぱりすごい積雪量だな。 一晩でこんなに積もるなんてな。」

雪はストレンジャーの靴が埋まるほど積もっており、約10センチはあるだろうと思われた。

「さて、たまにはテイルスの所に行ってみるかな。」

ストレンジャーはそのまま泉へ向かっていき、ワープゾーンを開いて、出かけていった。

ミスティックルーイン

しばらくすると、ミスティックルーインへと到着したストレンジャー。
テトラクリスタルアイランドとは違って、今は雪が降っていた。

「島の雪雲がこっちに着たのか。」

ストレンジャーは空から降る雪を見つつそう呟いた。
そして、テイルスの工房へ向かっていった。

「テイルス、いるか？」

ストレンジャーは工房の入り口をノックしつつ言った。
だが珍しく返事が無かった。

『？』

ストレンジャーは入り口を開け、工房内へ入った。
だがテイルスの姿は無く、部屋には誰もいなかった。

『地下エリアか？』

ストレンジャーはそう思い、地下エリアへ通じるマンホールを退かそうとした。
だが

「コンコンッ」

突如部屋の奥から声が聞こえ、ストレンジャーは声確かめるべく、一回マンホールの蓋を閉め、奥へと進んでいった。

「テイルス？」

ストレンジャーは奥の部屋へと入った。
するとそこには、顔を赤くし、ベッドに寝ているテイルスがいた。

「テイルス！？」

「ストレンジャー？」

テイルスは目を開け、ストレンジャーの姿を確認した。

「テイルス！ 大丈夫か！？」

「う、うん。 ちょっと頭が痛くて。」

「風邪か？」

ストレンジャーは付けていた手袋を脱ぎ、テイルスの額へ手を当てた。

「すごい熱、いつからだ？」

ストレンジャーは手袋をはめつつテイルスに問いかけた。

「昨日ちょっと寒気がして、早めに寝たんだけど、朝起きたら頭が痛くて。」

「まだひいたばかりか、まだ何も食べてないのか？」

「う、ん。」

「じゃあとりあえず待ってろよ。」

ストレンジャーはきびすを返し、一回外へ出て行った。

テイルスはおとなしくベットに潜った。

するとすぐにストレンジャーが戻ってきた。

手にはタオルと雪が。

「とりあえず頭を冷やした方がいいな。」

ストレンジャーはテイルスの額に雪の乗ったタオルを置いた。

「冷たい・・・」

「とりあえずコレで我慢しててくれ。」

「うん。 ありがとう コンコンッ。」

「今材料を調達してくるから。」

ストレンジャーは再び外へ出ると、トロピカルアイランドへ向かって飛んで行った。

テイルスはタオルを乗せたまま、目を閉じ眠った。

テイルスが再び目を覚ますと、部屋の奥から物音が。

「ス、ストレンジャー？」

テイルスは誰がいるかはわからないまま、声を出した。

「あ、テイルス、目が覚めたか？」

すると別の部屋にいたストレンジャーが顔を出した。

「大丈夫か？」

「う、うん。 少し。」

「とりあえず食べるもの作ったから、起きられるか？」

「うん。」

ストレンジャーが少し手伝いつつ、テイルスはゆっくり体を起こした。

先ほどと余り変わらず、顔が赤いままだった。

「トロピカルアイランドのレモンで作ったホットレモネードだ。 飲みな。」

「うん。 ありがとう。」

テイルスはストレンジャーからカップに入ったホットレモネードを受け取り、飲んだ。

「飲めそうか？」

「うん。 温かくておいしいよ。」

「そうか、よかった。」

そういうと再び、テイルスはレモネードを飲んだ。

しばらくして、レモネードを飲み終えたテイルス。

ストレンジャーはカップを受け取り、テイルスは再び、ベットへ入った。

「とりあえず、今日は寝てな。 しばらく看病するから。」

「ゴメンね。 迷惑かけて。」

「気にすんなくて。 元気になってくれれば、それでいいからさ。」

ストレンジャーはテイルスの額に手を当て、癒しの光をテイルスへあてた。

「少しは楽になったか？」

ストレンジャーは癒しの光を送り終え、テイルスに問いかけた。

「うん。 ありがとう。」

「どういたしまして。 じゃあまた少し、寝てな。」

「うん。」

テイルスはしばらく目を閉じ、寝てしまった。

ストレンジャーは部屋の奥にあったイスに座り、テイルスの様子を見守った。

テトラクリスタルアイランド

ストレンジャーがテイルスの元へ出かけている頃。

北側のエリアにいるジョイは、リビングで一人、一人掛けのソファに座り、昨日海岸で拾ったコインを磨いていた。

「うーん。 これ以上綺麗にならないなー」

ジョイは一回磨くのを止め、部屋の照明の明かりをコインに当て、表面をチェックした。

「でもまあ、コレでも綺麗だからいっかな。」

ジョイはソファから立ち上がり、コインを暖炉の上に飾った。

「うーん。 よし☆」

ジョイはコインをしばらく見たあと、外へ出かけていった。

お目当ての場所はもちろん海岸。

最近はずっと雪が降っているため、海岸には冷たい風が吹いていた。

「うーん、やっぱり冬ね、風が涼しいー」

ジョイは髪を海風に揺らしつつ言った。

「? あら？」

ジョイはふと、海岸に何かが打ち上げられているのを見つけた。

『昨日に続いて、珍しいこともあるのね。』

ジョイは打ち上げられたものを確かめるべく、物のそばへ寄った。
そこには昨日同様、コインが落ちていた。
だが昨日のとは違い、銀色で金より一回り小さいコインだった。

『今度は銀貨ね。 いったいどういうことかしら？』

ジョイは銀貨を洗いつつ、家へと戻っていった。

家へ帰ったジョイは銀貨を金貨の隣に置いた。

『うーん。 デザインはほぼ同じね。 材質と大きさが違うくらいを除いて、両方いっしょの物なのかしら？』

ジョイはそれぞれのコインを眺めつつ、観察していた。

『まあいっか。』

「ジョイー」

不意に、ジョイのいた部屋の扉が開き、アルドールが入ってきた。

「あらアルドール。 どうしたの？」

「ビリーブに頼まれてストレンジャーを探してるんだけど、知らない？」

アルドールはジョイに事情を簡単に説明した。

「ううん。 こっちには来てないわよ。 ピスフリーの方は？」

「ピスフリーも今日は会ってないって。 どこへ行ったのかしら？」

アルドールはストレンジャーの行きそうな所を考えつつ言った。

「あ、もしかしたらソニック達の所にいるんじゃない？」

ジョイはふとひらめき、アルドールに言った。

「あ、その可能性はあるかも。　ありがとうジョイ。」

アルドールはジョイに礼を言うと、部屋を出て行った。

ジョイは会話を終え、またコインをしばらく眺めていた。

アルドールは一度、ビリーブのいるストレンジャーの家へと向かっていった。

「ビリーブー」

「あ、アルドールさん。　ストレンジャーさんは見つかりました？」

ビリーブはアルドールの元へ駆け寄りつつ言った。

「ううん。　この島にはいないみたい。　で、ジョイがソニックさん達の所じゃないかって。」

「確かに行きそうな所といったらそこですね。　わかりました。」

ビリーブはアルドールからの報告を聞き終え、改めて礼を言った。

「ではこれから行って見てきますね。」

「私も行きましょうか？」

「いえ、用があるのは自分ですから。　あ、でもワープの扉を開けてもらってもいいですか？」

「いいわよ。　じゃあ行きましょ。」

「はい。」

会話を一通り終え、二人は泉の庭園へと向かっていった。

そして、泉の庭園へ着き、アルドールがワープの扉を開くと、ビリーブはソニック達のいる島へと出かけていった。

ミスティックルーイン

ビリーブがミスティックルーインへ付いたのはそれからしばらくしてからのこと。
外は雪が降っており、時間帯はちょうど夕方。
ビリーブはちょっと寒そうにマフラーに顔を埋めつつテイルスの工房へと向かっていった。

「こんばんは一。」

ビリーブは軽くノックをしつつ部屋へと入った。

「？ ビリーブ、どうしたんだ？」

部屋にはソファに腰掛けたストレンジャーがいた。

「あ、ストレンジャー。 ようやく見つけました。」

「俺を探してたのか？ ご苦労様。 で、なんの用だ？」

ストレンジャーは軽く礼を言いつつ、ビリーブに問いかけた。

「じつは、少々こちらの島に異常があるみたいで。」

「異常？ 闇がどうこうっていう、あれか？」

「はい、闇とはまた別の何かが。 こちらの島のどこかで出ているみたいで。」

「それは確かに気になる点だな。 まだどこかはわからないのか？」

「こちらに向かっていると、なんか段々気配が強くなってるんですけど。 まだわからないんです。」

ビリーブは少々毛を立てつつ、辺りの気配を探りつつ言った。

「ところで、ストレンジャーはこちらで何を？」

「ああ、テイルスがちょっと風邪をひいたみたいでな。 看病してたんだ。」

「テイルスさんが？ 状態は大丈夫ですか？」

「ああ、少し楽になったみたいだぜ。今は寝てるよ。」

「そうですか。」

ビリーブはテイルスが寝ている寝室へ向かっていった。

「多分まだ寝てると思うぜ。」

ストレンジャーはビリーブに言った。

ビリーブは部屋のベッドで寝ているテイルスの様子を見た。

テイルスはすやすやとベッドで寝ていた。

「・・・」

「ビリーブ？」

ストレンジャーはしばしその場で立ち止まったビリーブを見て声をかけた。

そしてビリーブのそばへ。

「どうしたんだ？」

「ストレンジャー。テイルスさんは本当に風邪ですか？」

「ああ、多分そうだと思ったんだが。・・・！違ったか？」

ストレンジャーはビリーブの様子を見つつ、確認した。

「ええ、少々普通の風邪とは違うみたいです。」

「じゃあビリーブが感じていたアレか？」

「はい、気配が類似していますから。ほぼ間違いありません。」

ビリーブはそう言いつつテイルスのそばへ。

そして手に札を召還し、テイルスのそばでかざした。

するとお札は急に端から燃え出し、お札は消滅した。

「札が。」

「このお札は汚れの強い部分でこのように燃え出すものです。今、テイルスさんには汚れの元となるものが忍び込んでいるようです。」

「じゃあテイルスが言っていた、寒気と頭痛の原因はそれか。」

「はい、でも何が原因なのかは、まだわからないんですけどね。」

「何とかしてその原因を突き止めて、テイルスを助けないと。」

ストレンジャーはベットで寝ているテイルスを見つつ言った。

「とりあえずテイルスさんを家へと運びましょう。ここでは面倒を見てくれる方が近くにいませんから。」

「わかった。」

ストレンジャーはテイルスを抱き上げ、工房を出て行った。

そしてそのままワープの扉を開き、テトラクリスタルアイランドへ戻っていった。

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

ビリーブからテイルスの危機を知ったストレンジャー。
テイルスを救う手立てを探すため、一時テトラクリスタルアイランドへ戻ってきた。
島には相変わらず、雪が降っていた。

「とりあえず、戻ってきたな。」

ミスティックルーインから戻ってきたストレンジャーとビリーブ。

「ひとまず、家へ向かいましょう。」

ビリーブはそういうと、ストレンジャーの先導に立ち、先に家へ向かって走っていった。
ストレンジャーはテイルスを抱えたまま、家へと向かっていった。

家へと到着した二人。
テイルスは連れてきたときと同様に、目を瞑り、深い眠りの中だった。
ストレンジャーは自分のベットにテイルスを寝かせた。

「ずっと寝たままだな。 大丈夫かな。」

ストレンジャーはテイルスへ毛布をかけつつ言った。

「呪いの力が段々強くなってきたんでしょうか。 早くなんとかしないと。」

ビリーブはストレンジャーの行動を見つつ言った。
すると、

コンコンッ

二人は自室で行動していると、扉からノックの音が

「誰だ？」

「こんにちは、ストレンジャー、ビリーブ。」

「遊びに来たよー」

やってきたのはアルドールとジョイだった。

「いらっしゃい、珍しいな二人して自室へ来るなんて。」

「お母様が二人とも部屋にいるよって、言っていましたから。」

「二人とも何してるの？」

二人もストレンジャーの部屋へやってきた。

「ちょっと看病をな。」

「あら、テイルスさん。」

アルドールはベットに寝ているテイルスを見つけ、そばに寄った。

「今は寝てるぜ。 ちょっとしたわけもあってな。」

「そうですか。」

「あらこの子って、前に遊園地に行くときに船を操縦してた子？」

ジョイはテイルスを見つつストレンジャーに言った。

「ああ、そうだけど。」

「へえー まじまじ見るとかわいいじゃん☆」

ジョイは寝顔を見つつ言った。

「で、二人は何かご用があったんじゃないんですか？」

そんな様子を見つつ、ビリーブは問いかけた。

「あ、そうそう、忘れてた。」

「実はね、こんなものを見つけたの。」

ジョイは持っていたコインをストレンジャーに差し出した。
金と銀のコインを。

「コインか？ それにしてはずいぶんでかいな。」

「でしょ？ なんなのかわからなくて、とりあえずストレンジャーの所に来たの。」

ストレンジャーは受け取ったコインを観察した。

「でも、今の俺たちだったら、ピスフリーの方が詳しいんじゃないか？」

「そうですね。 金属に関しては一番詳しいですよ。」

ビリーブは、ストレンジャーの持っていたコインを見つつ言った。

「あ、そういえばそうだったわね。」

「俺のこと、呼んだか？」

4人は声のした方を向くと、ピスフリーが部屋の入り口に立っていた。

「あらピスフリー、奇遇ね。 どうしたの？」

「ちょっと一人じゃ退屈でな。 遊びに着ただけだよ。」

「そうなの。」

「で、俺になんか用か？」

ピスフリーはジョイとアルドールを見つつ言った。

「このコイン、海で見つけたものなんだけど、なんなのかわからない？」

ジョイはストレンジャーから一枚コインを借り、ピスフリーに手渡した。

「ふーん。 変わったデザインだな。 それにでかい。」

「何か知らない？」

「ちょっとわかんないな。 このコインの絵柄がちょっと気になるけど。」

「絵柄？」

全員はいっせいに持っていたコインを眺めた。

「六法星？」

「まあ確かに、余り見ない絵柄ね。」

アルドールは絵柄を見つつ言った。

「情報って言ったら、コレくらいかな。」

「六方星ですか……」

ビリーブはストレンジャーからコインを借り、絵を見つつベットへ腰掛けた。
すると、

キラン！

「え？」

なんとビリーブが持っていたコインは急に光だした。
それと同時に、ピスフリーの持っていたコインも輝きだした。

「な、何？」

「！ テイルス！？」

ストレンジャーは光っているコインの隣で寝ているテイルスの様子を見つつ言った。
テイルスからなんと黒い靄が出始め、靄の一部がコインに吸い込まれた。
コインは靄を吸い込み終わると、再びただのコインに戻った。

「なんだ？ 今の。」

「今コインが輝いて、」

「テイルスさんから靄が出て、」

「その靄がコインに吸い込まれたわね……」

少々驚きつつも、状況を整理する四神達。
ビリーブは少々その様子を見つつ、はっとした。

「もしかしたら。」

ビリーブはそういうと、持っていたコインをストレンジャーに返し、手に札を召還し、テイルスのそばに寄せた。
すると札は燃えるが、札の半分までしか燃えなかった。

「闇の量が減った・・・」

「コインが吸い込んだからか？」

ストレンジャーはビリーブの言った事を聞きつつ、問いかけた。

「多分そうだと思います。 このコインと同じものが、テイルスさんから闇を吸い取ってくれるんだと思います。」

「だとすると、同じものを用意すれば、テイルスは目が覚めるのか？」

「確定は出来ませんが、多分。」

ビリーブはストレンジャーに結論を言った。

「だとすると、同じものを集めないと行けないのか・・・」

「あと何枚あるんでしょうか？」

アルドールはビリーブに問いかけた。

「多分出てきた霧が、闇の全てだとすると、あと1枚だと思います。 2枚で約半分以上は吸い込んでましたから。」

「金と銀だから、銅のコインか？」

「確定は出来ませんが、同じデザインのコインだと思います。」

ビリーブは少々悩みつつ言った。

「そうすると、今度は検索だな。」

「だけどあてが無いわね。」

「一応海を調べてくるけど、あるとは思えないのよね。」

三人はそれぞれコメントを述べると、少々考え込んだ。

「でも、探す手間は省けたみたいだな。」

「どうして？ ピスフリー。」

「このコインが教えてくれてる。」

ピスフリーは持っていたコインを見せつつ言った。

「ピスフリーも、俺同様に金属と干渉できるのか？」

「今の状況からすると、そうかもな。」

ピスフリーはコインの言う場所を聞きつつ言った。

「それで、どこにあるの？ もう一枚は。」

「ああ、とある場所で開かれる、カジノパーティの景品になってるんだと。 ビリーブの言ったとおり、もう一枚でセットみたいだな。」

「カジノの景品？」

「それで、場所は？」

アルドールは再びピスフリーに問いかけた。

「えっと、カジノポリスって所みたいだな。 オリエンタルシティの近くか。」

「ってことはソニック達のいる世界だな。」

「早速、情報収集に行ってみましょ。」

全員の意見が一致し、次の行動が決定した。

「俺はとりあえず看病してるから、情報収集、よろしく頼むぜ。」

「わかりました。」

ビリーブはストレンジャーにそういうと、3人を連れてオリエンタルシティへ向かっていった。

カジノの情報収集

オリエンタルシティ

ストレンジャーと別れ、とりあえずオリエンタルシティへやってきた4人。
ミスティックルーインからの電車に乗り、ホームへ到着した。

「さてと、情報収集と行きたいところだけど。」

「こうも簡単に見つかるものだったか？ 知りたい情報って。」

ピスフリーはホーム内に貼ってあったポスターを見つつ言った。

『冬の一代イベント！ カジノポリス主催、カジノナイトパーティ！』

「まさかイベント事になってたなんてね。」

「コレは入手が困難になってきたな。」

4人はポスターの前に留まり、悩んでいた。

「？ あら皆。 どうしたの？」

4人は駅のホーム内に立っていると、後方から買い物帰りのエミーがやってきた。

「エミーさん。 こんにちは。」

「久しぶりね。 ところで、そんな所に突っ立ってどうしたの？」

エミーは先ほどから気になっている疑問をアルドールに問いかけた。

「あのね。 このイベントの事なの。」

アルドールは少々横にずれ、エミーにポスターが見える様にした。

「ああ、カジノナイトパーティね。 私も参加してみたいなーって思ってたところなの。」

「そうなんですか？」

「せっかくだから、皆で出てみない？ ソニックを誘うきっかけにもなるし。」

エミーはとっさに思いつき、4人に提案した。

「確かに、人が多い方が楽しいしな。景品も手に入れやすくなるし、そうしてもらえるか？」

「いいわよ。」

「じゃあ決まりですね。」

皆の意見が一致し、決定した。

「じゃあこれから誘ってこないとね。」

「でもどこにいるかわかるのか？」

「大丈夫、多分その辺を走ってるから。」

エミーはそういうと、駅構内の外へ。

「ソニックー」

キキキッ

「呼んだか？」

エミーの一声に、ソニックがやってきた。

『す、すごい……』

『これって偶然でしょうか？』

『だとしたらすごいぞ？』

『エミーさんって、神ですか？？？』

「お待たせー」

そんな出来事に驚いている4人の元へ、ソニックを連れてエミーは戻ってきた。

「? どうしたの皆。」

「いや、さすがに一声だけで探している人物と会えるもんなのかって思って・・・」

「さっき会ったのよ。 それだけよ。」

「そ、そうですか・・・」

「とりあえずソニック、話は聞いたか？」

ピスフリーは先ほどのことはひとまず置き、ソニックに問いかけた。

「話は大体聞いたぜ。 どのみち、俺は構わないぜ。」

「じゃあ参加人数は6人ね。」

「そういうことになりますね。」

「あ、でもこのパーティ、今日の夜だし、参加の締め切りは今日の6時までよ？」

ジョイはポスターを見つつ言った。

「え? 6時!？」

「今って何時だったっけ。」

「あと3分で6時です・・・」

ビリーブは駅にある時計を見つつ言った。

「ちょっと! それってまずいじゃないの!？」

「場所はどこだ？」

ピスフリーはジョイに問いかけた。

「えっと、ここから少し行った、カジノポリスの中よ。」

「よし、任せとけ!!」

そう言うと、ソニックは駅から飛び出して行った。

「あ、そういえばソニックさんがいたから、あんまり心配すること無かったんですけどっけ・・・」

」

「そうよ、焦りは禁物よ皆。」

エミーは4人にウィンクしつつ言った。

「お待たせ、参加の申し込みをしてきたぜ。」

5人の会話を終えた直後、ソニックが帰ってきた。

「お疲れ様ソニック。」

「コレくらいいいって。」

「じゃあ、夜に備えて服を用意しないとね。」

「ソニック、今からペアにふさわしい服を、買いに行きましょ！」

「あ、そういえばそういうのが必要だったな・・・」

「じゃあ皆、夜に会いましょー」

そう言い残すと、エミーはソニックと共に駅を出て行った。

「じゃあ俺たちも戻ろうか。」

「まって、ビリーブの服が無いわ。」

アルドールはピスフリーに言った。

「いえ、僕はストレンジャーの代わりに看病込みの留守番をしていますから、いいですよ。」

「あら、そうは行かないわよ。」

ジョイはビリーブに言った。

「せっかくなんだし、ストレンジャー抜きで栄冠を持って帰りましょ！」

「またお前は変な提案を出して。でもまあ、服ならいっか。」

「ピスフリーさん・・・」

「ビリーブもたまには、ストレンジャーの変わりに頑張るのも、いいんじゃない？」

「アルドールさんまで・・・」

ビリーブは少々困った顔をしつつ言った。

「じゃあこれから服を買いに行きましょうか。」

「GOGO!!」

「ビリーブ、行こうぜ。」

「はい、わかりました。」

ビリーブは仕方なく、3人の言うとおりに、近くのデパートへ買いに出かけていった。

そして時間帯は夜。

カジノナイトパーティに出席するべく、アルドール達はカジノポリスへ向かって夜の街を歩いていた。

「さてさて、お待ちかねのカジノナイトね☆」

「いったい何のカジノで楽しむのかしらね？」

「景品、いただけるといいな。」

「そうですねー」

4人はそれぞれ正装と思われる洋服を身にまとい、カジノへ向かっていた。

アルドール達は、もちろん四神の服で。

ビリーブはというと、デパートで買った洋服に、ストレンジャーから借りたマフラーを身にまとっていた。

「あ、エミーさんとソニックさんですよ。」

「あ ハイ、アルドールー」

エミーとソニックも、こちらの姿を確認し、手を振っていた。

「お待たせー、今晚はよろしくね。」

「こちらこそ、楽しみましょうね☆」

「じゃあ、行こうか。」

6人はいっしょに、カジノポリス内へ向かっていった。

カジノポリス 通用ルート

「うわぁー、すごい内装ー」

「さすがイベント会場のカジノだな。」

ジョイたちは入って早々、カジノの装飾や雰囲気当を見つつ言った。

「あ、イベントのスケジュールがあるわよ。」

ジョイは壁に貼られているポスターを見つつ言った。

ソニック達もポスターの前へ集まった。

「えっと、ルーレットとスロットとカードゲームが主みたいね。」

「景品は全部のやつにそれぞれあるのか。」

「コインの出る大会はどれかしら・・・」

アルドールはポスターに書かれている事をひとまず確認しつつ言った。

「さすがにどれかはわからないな。」

「皆さん、ここに景品がたくさんありますよ。」

ソニック達がポスターを見ていると、不意に後方からビリーブが声をかけてきた。

「え？ どこ？」

「こちらです。」

ビリーブがいるところにソニック達は集まってきた。

そこは『景品置き場』と書かれた大き目の部屋だった。

だが入り口は閉まっており、窓から見られるようになっていた。

「うわぁすごい景品の山！！」

アルドールは飾られていた景品を見つつ言った。
中には金品はもちろん、食べ物や家財道具。
その他もろもろが展示されていた。

「やっぱりイベントごとがあるだけのことがあるな。」
「あ、でも肝心のコインが見あたりませんね。」

ビリーブは少々背伸びをしつつ言った。

「そういえば無いわね。」
「ピスフリー、本当にここにあるの??」

ジョイは少々問い詰める感じにピスフリーに言った。

「間違いないって、多分別のなのかもしれないぜ。」
「まあ、それもあるわね。」

ジョイはそういうと、参加者の集まっているホールへ向かっていった。

「俺たちも行こう。」
「はい。」

ソニック達もジョイのあとについていった。

カジノナイトパーティ

カジノポリス 中央ホール

ホールへ到着すると、これまたすごい広さの部屋に大勢のお客がたくさんいた。

「またすごい数だな。」

「こんなに参加してる人たちがいたんだー」

ソニック達はホールに置かれた近くのソファに座った。

「まだパーティは始まってないのよね。」

「ああ、開始時にそれぞれにコインが渡されるようになってるみたいだぜ。」

ピスフリーは先ほど入り口で貰っておいたパンフレットを見つつ言った。

「じゃあもうそろそろかな。」

ジョイはそう言うと、突然ホールの証明が落とされた。

「？ あら何かしら？」

ソニック達は辺りを見渡していると、ステージに証明が当てられた。

ステージにはドレスを身にまとった女性が立っていた。

『皆様、今夜はここ、カジノポリスへお越しいただき、まことにありがとうございます！』

ステージにいた女性はお客様に向かって言った。

だがソニック達にはその人の顔を見たことがあった。

「あ！ ピーチ姫！」

「ってことは今回のもピーチ姫の主催だったのか。」

ソニックとアルドールは口をそろえていった。

「あら？ お知り合い？」

「ええ、以前カートレースであったことがあるの。」

アルドールたちが話している間にも、ピーチ姫はいろいろとパーティについて説明をしていた。

『そして、今夜のメインイベント、ポーカーチェイスバトルで勝利したお客様には、記念品として、トロフィーとこちらのメダルを贈らせていただきます！』

そうするとピーチ姫はステージに置かれていたテーブルに乗っていたメダルをお客様に見えるように見せた。

「あ！ あのメダル！」

「？ どうしたビリーブ。」

ビリーブはピーチ姫が掲げたメダルを見つつ声を上げた。

「あのメダル、六法星が描かれていました。」

「ってことは今夜のメインイベントの景品だったのね。」

ジョイは遠くて余りよく見えないメダルを見つつ言った。

『それではお客様方、お近くのディーラーからコインを受け取ってくださいませ。 お手持ちのコインをゲームでいち早く100枚になった10名様に、このメインイベントの参加資格が贈られます。 皆様、頑張ってくださいね。』

ピーチ姫がそうすると、ホールに証明が灯され、それぞれディーラーがコインを配り始めた。ソニック達の座っていたソファにもディーラーであるキノピオがやってきた。

「お客様の幸運をお祈りいたします。」

ディラーはそういって、ソニック達にそれぞれコインが10枚乗ったボードを手渡した。

「じゃあこれからは別行動ね。」

「早い者勝ちって言うものね。」

ソニック達はソファから立ち上がった。

「じゃあ私はスロットで頑張ろっと。」

エミーはそういってスロット台へ向かっていった。

「じゃあ俺は普通のルーレットで稼いでいくかな。」

「あ、私も行きますー」

ソニックがそういって、アルドールもいっしょにルーレット台へ向かっていった。

「皆甘いわね。」

残ったジョイはソニック達の行動に呟いた。

「何ですか？」

「スロットなんてタイミングで当たらなきゃダメだし、ルーレットは賭ける場所が多すぎて当たらないわ。」

「じゃあどうすればいいんですか？」

ビリーブはジョイに問いかけた。

「もちろん、あとで自分で掛け金がチョイスできるカードゲームに決まってるわよ。」

「まああとなら何でも出来るしな。」

「そうですね。」

ピスフリーとビリーブは納得した。

「そうと決まったら私たちも行きましょう！」

ジョイはコインの乗ったボードを持って、近くの台へ向かっていった。
ピスフリーとビリーブも分かれて別の台へ向かっていった。

数分後・・・

「あーん。 全然ダメだったわ。」

スロットでコインを増やそうとしていたエミーはスロット台を前に呟いていた。

「全然当たらない。 コレ壊れてるんじゃないの？」

エミーはさっきまで使っていたスロット台を突つきながら言った。

「仕方ない、もう一回コイン貰ってこよっと。」

エミーはスロット台を離れ、ディーラーにコインを貰いに行った。

一方、ルーレット台のソニックとアルドール。

「なかなかコインが増えねえな。」

「ええ、プラスにはなりますけど、なかなか大きく行きませんかからね。」

ソニックとアルドールはルーレットの中で回る玉を見つつ言った。

「他の皆さんはどんな調子でしょうか・・・」

「あとで確認してみるか。」

ソニックとアルドールはゲームを楽しみつつ言った。

一方、分かれたピスフリーはというと。

「よし！ フルハウス！！」

ポーカーで大きな目を出し、着々とコインを増やしていた。

「えっと、今は58枚か。 まだまだ足りないな。」

『会場の皆様、ここで最初の勝者が出ました！！』

「え！？」

ピスフリーは声のしたステージを向いた。

するとそこにはピーチ姫と

「ジョ、ジョイ！？」

なんとピーチ姫の隣にはジョイが立っていた。

『こちらのお客様がただ今最初の関門を突破いたしました！』

「まじかよ、さすがだなジョイ。」

『それでは、皆様も頑張ってくださいね！』

「ち、負けてられるかって。」

ピスフリーは新しくカードを貰い、新しいゲームに熱を出していた。

「さすがジョイさんですね。 ストレンジャーさんが強運だって言っていた事がわかりました。」

こちらはピスフリーとは別のテーブルで頑張っていたビリーブ。

ピスフリー同様にカードゲームで頑張っていた。
こちらはブラックジャック。

『ええっと、今は18ですか・・・』

ビリーブは持っていたカードを見つつ心の中で呟いた。

「どうしようかな・・・」

「多分そのままでもいいんじゃない？」

ビリーブは悩んでいると、さっきまでステージにいたジョイがそばにいた。

「ジョイさん。」

「そのままでも強いから、多分大丈夫よ。」

「わかりました。」

ビリーブは持っていたカードをテーブルに置き、コインをセットした。

「ええっと、ただ今のゲーム。 2番の方の勝利です。」

「え？」

ちなみに二番テーブルはビリーブ。

「ほらね。」

「すごいですねジョイさん。」

ビリーブはコインをディーラーから貰った。

「今何枚？」

「ええっと、あ、ちょうど100枚になりました。」

ビリーブは持っていたコインを数えつつ言った。

「よし、じゃあステージに報告しましょ！」

「ハイ！」

ビリーブはコインを持ってステージへ向かっていった。

ゲームが開始して1時間。

『皆様、ただ今の時間を持ちまして、ラストゲームへ参加できるお客様が決定いたしました！』

ホール内にピーチ姫の声が響いた。

「え！ もう！？」

「あともう少しだったんだけどな。」

「残念ですね。」

「チッ！ 今回もダメだったか。」

ソニック達はコインが足りず、予選で落ちてしまった。

数名を除いて。

『さて、いまステージにいらっしゃるお客様方が、本選に挑まれる方々です！』

ピーチ姫はそういうと、ステージの下から参加していたお客様方が出てきた。

「あ！ ビリーブもいた！」

「ってことは俺たちの中から2人も決勝に上がったのか。」

「すごいですね二人とも。」

ソニック達はステージの上にいるジョイとビリーブを見つつ言った。

『それでは、こちらにいらっしゃる方々に、今夜のメインイベント、ポーカーチェイスバトルに参加していただきます！』

ピーチ姫がそういうと、ステージにゲーム台とイスが出てきた。

決勝戦の参加者はそれぞれイスへ座った。

ソニック達はそれぞれ近くのソファへ移動した。

『それでは、ポーカーチェイスバトル、開始です！！』

カジノナイトのバトルが切って落とされた。

ポーカーの行末

カジノポリス 中央ホール

カジノポリスでのカジノパーティに参加したソニック達。
最終イベントの景品にお目当てのものを発見し、ジョイとビリーブがそのゲームの参加資格を得た。

『ええっと、どれとどれを変えようかな・・・』

ステージ上に用意されたテーブルの席にいるジョイとビリーブ。
だが余りよく知らないゲームに、ちょっとビリーブは困惑していた。

『どうしよう。 あんまりルールを知らないから良くわからないよ。』
「? あらビリーブ、どうしたの？」

隣の席に座っていたジョイは顔色が少々よろしくないビリーブを見つつ言った。

「あんまりルールを良く知らなくて。 どうしようか迷ってるんです。」
「確かに困ったわね。 同じ参加者同士だから、見ることは禁じられてるものね。」
「とりあえず、なんとかがんばってみます。」

そういうと、ビリーブは適当なカードをチョイスし、ディーラーからカードを受け取った。

「ええっと、あ、3が3枚になりました。」
「ってことはスリーカードね。 そんな感じでとりあえず頑張るって。」
「はい。」

ビリーブは本当に運任せでゲームを開始した。

一方、ステージ上にはいないソニック達はというと、パーティが開始された時まで座っていた

ソファに腰掛けていた。

「あ、ビリーブがなんか困った顔をしてる。」

パーティに参加し、参加賞としてもらった双眼鏡でビリーブとジョイの様子を見ていたエミーは言った。

「え？ そうなんですか？」

エミーから双眼鏡を借り、アルドールもビリーブの様子を見た。

「あ、本当です。 どうしたんでしょうか・・・」

「そういえばビリーブって、カードゲームしたことあるのか？」

ソニックはふと思い、アルドールとピスフリーに問いかけた。

「いや、俺たちの知ってる限りでは、やった所を見たことないな。」

「そういえばそうだったわね。 ってことは・・・」

アルドールとピスフリーは顔を見合わせ、こう言った。

「ルールを知らないってことに！？」

「ルールを知らないってことか！？」

二人はほぼ同時に言った。

「これは確かにまずいな。 ゲームの参加者同士はカードを見られない。 ジョイからもアドバイスできないってことか。」

「そういうことになりますね。」

ソニック達はビリーブとジョイの様子を見つつ言った。

「あらソニックさん、エミーさん、アルドールさん。 こんばんは。」

そこへ、主催者であるピーチ姫がグラスを片手にやってきた。

「あ、ピーチ姫。　こんばんは。」

「ピーチ姫がこのパーティの主催者だったんですね。」

「ええ、またパーティを開くことになりました。　それで、どうかなさいましたか？」

ピーチ姫はソニック達の先ほどまでの様子を見ており、声をかけたのであった。

「実は、俺たちの知り合い二人が、最終ゲームに参加してるんだけど。」

「あのマフラーをかけた黄色い犬、ビリーブが、ルールを知らないって今知って。」

「そうだったんですか。　そこまで配慮はしてませんでしたからね。　気がつきませんでした。」

ピーチ姫は少々考えつつ言った。

「では、アシスタントとして、誰かビリーブさんの助手としてステージに上がりますか？」

「え、そんなことしていいんですか？」

「もちろん。　わたしが主催者ですから。　でも、反則と疑われないように、半透明のシェルターを参加者の皆様の所に張りますから。　ご安心下さい。」

「よし、じゃあ誰が行くかだな。」

ピーチ姫からの提案で、ビリーブのアシスタントが出来ることになった。

そして、誰が行くか決めることに。

「俺が行くよ。」

「あ、私も行くわ。」

アルドールとピスフリーが席を立ちつつ言った。

「では、お二方いっしょにステージへどうぞ。」

ピーチ姫はステージへ向かいつつ言った。

「頼むぜ、二人とも。」

「はい、了解しました。」

アルドールとピスフリーも、ステージへ向かっていった。

『参加者の皆様、最終ゲームを皆さんで楽しんでもらえるよう、また、あまりルールを良く知らないための方に、アシスタントを参加者の方一人につき一人、付けさせていただきます。』

ピーチ姫はマイクを片手にホールにいる参加者の方々へ連絡した。

『アシスタントを希望する方は、ステージへお集まりくださいませ。』

ピーチ姫はそういうと、ピスフリーとアルドールをジョイとビリーブの元へ連れて行った。

「あ、ピスフリーさん。 アルドールさん。」

「よう、俺たちも助太刀するぜ。」

「4人で頑張りましょう！」

ビリーブの後ろにアルドールとピスフリーがやってきた。

「コレで何とかかなりそうね。 頑張ってるねビリーブ。」

「ハイ、頑張ります！」

ビリーブは持っていたカードを二人に見せ、4人で栄冠を目指してゲームを再び開始した。

そしてしばらく時間が過ぎ、次々とゲームの敗者を除き、ジョイとビリーブと、もう一人の参加者だけとなった。

「ええっと、Jのフォーカード！」

ビリーブは手札の目を言いつつテーブルにトランプを並べた。

「私も、Aのフォーカードよ。」

ジョイも持っていた手札をテーブルに並べた。

だが相手は、

「Kのフォーカードだ。」

キングが4枚そろった手札を出してきた。

「あ、ってことは僕の負けですね。」

ビリーブは負けが確定し、席を外した。

「お疲れ様、ビリーブ。」

「良く頑張ったぜ。」

「いえ、アルドールさんとピスフリーさんのおかげです。ありがとうございました。」

ビリーブはステージの外れにいたアルドールとピスフリーにお辞儀をした。

「あとは任せて、ビリーブ。」

「はい、ジョイさんも頑張ってくださいね。」

ビリーブ達はステージをあとにした。

『さて、今度はどれを切ろうかしら・・・』

ジョイは配られた手札を見つつ考えていた。

手札は、ハートのA、J。 クラブの2。 スペードの4。 ダイヤの5だった。

『点でバラバラ。 確率的にはストレートが無難ね。 でもファイナル。 相手も強い目を出してくるのは確実。』

ジョイはさらに手札と睨めっこを繰り返していた。

『よし、一か八かで行くわよ！』

ジョイは手札を出し、ディーラーからカードを受け取った。

『ええっと。』

「私はスペードのストレートフラッシュだ。」

相手の参加者は手札をテーブルに並べた。

確かにスペードの9～Kまでそろっていた。

「さて、お嬢さんは？」

「ウフフ、残念だけど、フィナーレは頂かせてもらいますわ。 ハートのロイヤルストレートフラッシュ！」

ジョイはハートの10～Aまでをテーブルに出した。

「おや、では私の負けですね。」

「ありがとうございました。」

ジョイと相手の参加者は握手をした。

『お客様、ただ今をもちまして、ポーカーチェイスバトルの勝者が決定いたしました！』

ピーチ姫はマイクを片手にステージへ上がってきた。

『今回のパーティの勝者は、ジョイ・スコールさんに決定いたしました！！』

ピーチ姫はジョイのそばで勝者の名前を読み上げた。

そして、トロフィーとお目当てのメダルが手渡された。

「おめでとうございます。」

「ありがとうございます。 ピーチ姫。」

ジョイは笑顔でそう言った。

「お疲れ様、ジョイ。」

ジョイはトロフィーとメダルを片手にソニック達の下へ帰ってきた。

「優勝おめでとうございます。」

「ありがとう皆。 優勝は頂いてきたわよ☆」

「おめでとうー」

ソニック達はそれぞれジョイに一言を贈った。

「それで、メダルは？」

「ええ、ちゃんとお目当てのコインよ。 六法星が描かれているわ。」

ジョイはメダルの入ったケースを開け、アルドール達に見せた。

「ああ、探していたものはコレだ。」

「よかった。 コレでテイルスさんが目を覚ましますね。」

「え？ テイルスがどうしたんだ？」

ソニックはビリーブの言ったことに疑問を持ち、アルドール達に聞いた。

「あ、ソニックさん達は存じていませんでしたね。 実は・・・」

ビリーブは手短かにいままでの事を説明し、メダルを必要としていた事情を説明した。

「そうだったのか。 テイルスが風邪を。」

「今は工房じゃなくて、ストレンジャーの家にあります。 いっしょに行きますか？」

「ああ、俺たちも行っていいか？」

「私も。」

ソニックとエミーは口々にそう言った。

「もちろん。 島を救っていただいたときにお世話になりましたもの。 それくらい構いませんよ。」

「島の管理と責任者は、俺たちだからな。」

「ありがとう。」

「では今から向かいましょう。」

ソニック達はパーティをあとにし、テトラクリスタルアイランドへ向かっていった。

テトラクリスタルアイランド ストレンジャーの家

一方、カジノパーティをしている頃、ストレンジャーはテイルスの看病込みで留守番をしていた。

先ほどからテイルスは目を覚まさず、ずっと寝ていた。

『テイルス。』

ストレンジャーはテイルスの額に手を当て、無駄かもしれないと思いつつ、癒しの光を送っていた。

『目を覚ましてくれ。』

ストレンジャーは外で雪が降る中一人、ずっと看病していた。

「ストレンジャー！ テイルス！」

するとそこに、パーティを終え、戻ってきたソニック達がやってきた。

「ソニック！ エミー！ どうしてここに？」

「アルドール達からパーティと事情を聞いてな。 テイルスは？」

「今日はずっと目を覚まさないんだ。」

ストレンジャーはテイルスを見つつそういった。

「それで、コインは？」

「ええ、バッチリゲットしてきたわよ！」

ジョイは持って帰ってきたメダルとコインの入った箱を差し出した。

「開けるぜ。」

ストレンジャーは箱を開けた。

そこには銅で出来たコインが入っていた。

「よし、コレだな。」

ストレンジャーはコインを片手にテイルスのそばへ寄せた。

するとコインは金銀同様に、黒い霧を出現させ、すべて吸い込んでしまった。

するとコインはそのまま消滅してしまった。

「あ、コインが。」

「う、ううん。」

それと同時にテイルスの声が。

「うーん。 良く寝た。」

テイルスはベットから起き、体を伸ばした。

「テイルス 大丈夫か？」

「あ、ストレンジャー、と皆。 うん。 もう大丈夫だよ。」

「よかった。」

「ところで、ここは？」

テイルスは今まで寝ていた部屋を見渡しつつそういった。

「俺の部屋だ。 実は頭痛の原因が違うものでな。 話すと長くなるけど。」

「そうだったの。 ありがとうストレンジャー。」

「いや、今回は、ジョイのおかげだ。」

ストレンジャーはジョイを見つつそういった。

「そっか。 ありがとう、ジョイ。」

「いいえ。 気にしないで。」

テイルスはジョイにお礼を言うと、ベットから立ち上がった。

「皆、心配かけてゴメンね。」

「ううん。 テイルスが元気になってよかったわ。」

「俺たちが様子を見にいけなくてゴメン。」

「そんな事ないよ。」

ソニック達はそれぞれ言い、元気になったテイルスを見ていた。

「みんな、今日はもう遅いから、皆泊まっていきなよ。」

ストレンジャーは外の風景を見つつ言った。

外はもう夜。 雪が綺麗に降っていた。

「え？ いいのか？ 部外者が島にいて。」

「だから、さっきも言ったけど。」

「今は俺たちの主導権にあるんだぜ？」

ピスフリーとストレンジャーは言った。

「そうだったな。」

「じゃあ今晚はお泊りしていくね。」

テイルスはお言葉に甘え、OKを出した。

「エミーさんは私達と泊まりますか？」

「そうね、アルドールの家で楽しく過ごしましょ！」

「わかったわ。」

女子が女子どうしで話がまとまった。

「じゃあ今晚はよろしくな。」

そんなわけで話はまとまり、ソニック達は一晩、テトラクリスタルアイランドに泊まることになった。

男子はストレンジャーの家。 女子はアルドールの家で。

雪が降る中、二つの家ではそれぞれで楽しい一晩を過ごしたのであった。

寒い日ならではの、家での過ごし方を。

—E P I S O D E E N D—